

1 研究主題について

- (1) 研究主題 学びを深める児童の育成
 ～自分の思いや考えを伝え合う活動の充実を通して～

(2) 主題設定について

研究主題の「学びを深める児童の育成」とは、教員が一方的に提示した課題を解決するのではなく、児童自らが学ぶ楽しみや価値を見い出し、主体的に友達や教材と対話しながら学びを深める児童と捉えた。具体的には、教科書教材から学び、並行読書材を通して学んだことを深めていくこととした。

また、副主題の「自分の思いや考えを伝え合う活動の充実を通して」とは、具体的な子供の学習場面での活動を示している。これは平成 29 年度告示の学習指導要領解説 国語編によると、国語科の目標は「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とある。本校の副主題は、この国語科の目標の「言語活動を通して」というところに当てはまる。つまり、学習指導要領解説に示されている言語活動例に準じたり、その言語活動を充実させたりすることが本校の研究の軸になると考えた。

本研究主題に迫るために、次の 2 つを研究の柱とした。1 つは、言語活動である。これは、指導事項を意識したゴールの設定であること、そして、魅力的なゴールを設定した言語活動モデルの作成を大事にすることである。2 つは、交流活動である。これは、相手と目的を意識した交流活動の設定、そして、交流の進め方を知るモデル動画の作成を大事にすることである。

(3) 研究主題に迫る 2 つの手だて

① 言語活動の工夫

言語活動が、子供たちにとって課題を解決する過程であり、課題を解決することを通して当該単元で身に付けるべき資質・能力が身に付くような言語活動を設定した。また、単元の導入時に教員作成の言語活動モデルを提示したり、読書座談会のモデル動画を見せたりすることで、子供たちの「この学習が何の役に立つのか」、「何のために学習をしているのか」という課題意識が、単元が始まるときから終わるときまで、途切れることなく続くようにした。

このように、子供たちがその学習の価値や楽しさを分からずに、一方的に教員の話聞いていただけでは資質・能力は育たない。学ぶ目的や意義を子供たちが実感できるような言語活動を設定した。

② 交流活動の工夫

今までは、学級全体での交流を教師主導で行い、物語や説明文を深く理解している数名の子供の意見に頼った授業を行うことがあった。授業後の板書だけを見ると、読みが深いように見えるが、子供たち一人一人が深い読みができるようになったのかは明確ではない。そこで子供たち一人一人が考え、一人一人の目的によって交流ができるような交流活動になるように工夫をした。その際に「なぜ話し合うのか」、「話し合う目的は何か」、「話し合いによってどうなるのか」について、子供たち自身が目的意識をもてるようにした。

また、1 単位時間の中での交流活動の設定の仕方も工夫をした。従来は全体指導→個の学び→ペアやグループでの交流活動→全体共有という流れが一般的であったが、本当に子

供たちが必要感をもって交流ができるかを考えたとき、上記のような形式ばかりではないと考えた。例えば、子供たち自身の考えが形成されてから交流をしようとする、ワークシートを音読し合うだけの交流になってしまうことがあった。そこで、交流をする際は、ノートやワークシートに自分の考えを書く前の段階に設定した。これにより、話し合うことで児童自身の頭の中が整理されて、その後の活動に生かすことができるようになってきた。

(4) 目指す児童像

児童の実態を踏まえ、学びを深める児童の育成のために、目指す児童像を2学年ごとに設定し、学習指導要領の国語科と結び付けることで、本校の研究のねらいを達成できると考えた。

低学年	中学年	高学年
言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする子	言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする子	言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする子

2 研究の概要

(1) 研究の方法

- ・ 校内研究の年間計画や研究主題について、児童の実態や前年度の課題を基に提案する。
- ・ 研究分科会や研究全大会を通して、講師の京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生から指導を受ける。
- ・ 全ての教員が低学年分科会・中学年分科会・高学年分科会のいずれかに属し、1回ずつ国語科の授業研究を行う。
- ・ 研究の成果と課題を検証する。

(2) 研究経過

月日	研究形態	内容
4月28日	研究全体会	・ 研究主題の確認 ・ 研究の年間計画 ・ 児童の実態把握
5月30日	研究全体会 研究授業	・ 第6学年「おすすめの本を紹介しよう」 ・ 教材名：「帰り道」 ・ 授業者：伊藤 真奈実 先生 ・ 講師：京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生
6月24日	研究全体会 研究授業	・ 第3学年「お気に入りの本を読み、詩をつくって、本のみ力を友だちに伝えよう」 ・ 教材名：「まいごのかぎ」 ・ 授業者：佐藤 裕一 先生 ・ 講師：京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生
7月15日	研究全体会 研究授業	・ 第5学年「日本語の秘密を発見して、自分の考えを6年生に伝えよう」 ・ 教材名：「言葉の意味が分かること」 ・ 授業者：佐藤 航 先生 ・ 講師：京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生
9月8日	研究全体会 研究授業	・ 第2学年「お話を読んで、お気に入りの場面を3年生に紹介しよう」 ・ 教材名：「お手紙」 ・ 授業者：大塚 万里萌 先生 ・ 講師：京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生

9月19日	研究全体会 研究授業	<ul style="list-style-type: none"> ・第4学年『『じ〜ん』 とくる物語を読んで、『思いのとびら』で全校児童に紹介しよう』 ・教材名：「ごんぎつね」 ・授業者：石渡 茜 先生 ・講師：京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生
10月27日	研究全体会 研究授業	<ul style="list-style-type: none"> ・第1学年「マイふきだしをつかって、わたしのぐつとポイントを2ねんせいにしようかいしよう」 ・教材名：「くじらぐも」 ・授業者：園田 禎恵 先生 ・講師：京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生
12月19日	研究発表会 中間発表	<ul style="list-style-type: none"> ・講師： 国立教育政策研究所 教育課程調査官 学力調査官 平山 道大 先生 ・講師：京都女子大学 教授 水戸部 修治 先生
2月27日	研究全大会	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の成果と課題 ・次年度の研究について

(3) 実践報告

○高学年分科会 第6学年の実践

ア 単元名：お気に入りの本を読み、サムネイルを作って、本の魅力を友達に伝えよう

イ 教材名：教科書教材『帰り道』（光村図書 6年）

並行読書材『小学五年生』（重松 清 作）から

ウ 単元の目標

・登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができる。

〔思考力・判断力・表現力等〕C(1)イ

エ 研究主題に迫る手だて

(ア) 言語活動について

本単元では、サムネイルを作成して本の魅力を推薦するという言語活動を行うために、交流を通して自分なりに描写を捉える学習計画を設定した。サムネイル作成の目的は、気に入った本の魅力を友達に伝えるためとした。本の魅力を伝えるために、作品の中で印象に残った文や言葉を「心に響く一文」として、サムネイルの表紙に表れるようにした。このサムネイルは、一文に興味を惹かれて中身を見てみると、印象に残った言葉や文を選んだ理由がまとめられている構造となっている。そして、読者がこの作品を読みたいと思わせる仕掛けとなっている。同じ作品を読んだ人同士でも、選ぶキャチコピーに違いがあり、描写の捉え方を比較できると考えた。

〔言語活動モデル〕

1枚目

最後のほうを早口で、高橋さんは言った。

『銀色の裏地』 石井 睦美 作

【心に響く一文】
自分が心に響いた言葉や文を選ぶ。

【背景】
本の魅力を紹介するために、背景を工夫してもよい。

【2枚目の入り口】
2枚目を小さく貼る。クリックしたら大きく見ることができるようにする。

2 枚目

この文は、放課後のプレーパークで高橋さんが理緒に銀色の裏地について語ったときのものである。

二人の関係は、まだ、それほど仲がよいわけではない。

高橋さんは、理緒に対して、興味をもって、落ち込んでいる理緒をはげまそうとしている。

理緒は、高橋さんに対して、最初は話しくいと思っていたが、話をしていると、「はずむような声」になり、これから仲良くなっていくと想像できる。

早口なのは、高橋さんが少し落ち込んでいるわたしをはげまそうとしているけど、二人の関係はまだそれほど仲がよいわけではないので、高橋さんが少し照れているためである。

6年 寺島 なすお

【一文を選んだ理由】

自分が心に響いた言葉や文を選んだ理由を、登場人物の相互関係や心情などの描写を基に説明する。複数の描写を繋げて、自分の読み深めた作品の魅力をまとめる。

二人の関係性やお互いをどう思っているのか等を書いたり、心に響く一文を解説したりする。

〔C 読むこと イ〕

(イ) 交流活動について

㊦相手と目的を意識した交流活動の設定

本単元では、心に響いた言葉や一文を選び、その理由を説明することで、本の魅力を伝える活動を設定した。子供たちは「選んだ言葉や文が、魅力を説明する上で十分な言葉や文になっているか」や、「選んだ言葉や文の理由を十分に説明できるか」という目的をもって、友達と交流する場面を設定した。また、本の魅力を伝える相手は、作品を通読していない5年生である。5年生が朝読書の時間に、6年生が作成したサムネイルを見て自分が読みたい作品を選ぶ設定とした。これにより、心に響いた一文でいかに読者の興味を惹きつけられるか、また、心に響いた一文の説明で読者に作品を手にとってもらうという相手意識・目的意識がとても重要になると考えた。

㊧交流の進め方をつかむためのモデル動画の作成

自分が選んだ言葉や文について、友達と交流することによって選んだ理由をより明確にすることができると考えた。今までの実践で、子供たちが思いや考えをもっているが、うまく交流できないということがあった。そのため、交流のモデル動画を作成し、交流の目的を明確にしたり、交流の方法を具体的に提示したりした。

3 まとめと今後の課題

(1) 成果

- ・教員が単元前に言語活動モデルを作成することで、当該単元で必要な資質・能力を具現化することができ、指導の際に的確な助言や支援ができるようになった。
- ・交流を柔軟に扱うことにより、子供たちが目的をもって、必要なときに交流活動をすることができた。

(2) 課題

- ・児童にとって、言語活動が魅力的であったかどうかの検証が十分ではなかった。児童の興味や発達段階に応じた言語活動を位置付けることが課題である。
- ・交流する際に、自分の読みを考えながら相手に伝えることはできていたが、相手の考えを聞いて、それに答えたり、相手の考えをはっきりさせるような質問をしたりすることに課題があった。